

## 香港通信 (2) 香港大学での講義編

大串葉子 (おおぐし ようこ)  
新潟大学

### 1. はじめに

2015年9月から香港大学経済・経営学部滞在中です。今回は大学の講義スケジュールと内容、国際色豊かな学生たち、そして最後に、中国本土との関係についてお話しします。

### 2. 講義スケジュールと内容について

講義は、9月1日から11月30日までと1月中旬から4月30日までの2つの学期に分かれて運営されています。1回が60分のものであれば、90分や270分(3時間)のものもあり、教科や教員によって違います。1回の時間が長いものは応用科目が多く、どちらかの学期に講義を集中させることで、もう一方の学期を研究や教材開発に充てている人もいます。どの世界もそうでしょうが、職位が高いほど講義の自由度を高く設定できるようで、ある教授は、「教えるのは3カ月だけ」とのこと。その代わりに、昼から夜遅くまでの講義に加えて、提携校や個人的なつながりで教鞭をとっている中国本土やフランス、アメリカなどを飛び回りながら講義を行っています。

どちらの学期も reading week (読書週間) が7週目に設けられており、その週の講義は全部お休み。学生は思い思いにテキストを読み込んだり、たまった課題をこなしたり、教員を訪ねて疑問点を解消したりして過ごします。教科によっては、この週に海外での課外活動があります。学生のなかには、「飛行機代やホテル代が安い時期なので、オーストラリアにバカンスに行ってきた」というツワモノもいましたし、海外からの留学生は帰省したりしています。教員も、研究発表を行ったり、院生を集中指導したり、海外に集中講義に行ったりと様々に過ご

しています。講義が始まってからの6週間はかなりの密度で講義をこなすので、学生にとっても教員にとっても、リフレッシュのための大切な1週間です。

講義内容は、各回分の綿密なシラバスが用意され、学内で閲覧が可能です。経済・経営学部らしく、経営の基礎と会計の基礎、それに、経営情報システムの基礎から始まり、学生各自の興味に応じて応用科目までを取得しています。文系における経営情報システムは、以前は会計学に不可欠なものとして会計情報や生産情報の把握のための文脈で教えられてきましたが、最近では、イノベーションやビジネス変革と一緒に分類されています。私は、Farhoomand 教授の Creativity and Business Innovation (CBI) と Business Transformation (BT) の2つの講義に参加しました。香港は中国の一部となってもうすぐ20年ですが、教授に対しても“Ali”とファーストネームで呼ぶ習慣は続いていて、学生たちと和気あいあいの雰囲気です。

学生は、講義内容をシラバスで事前に確認したうえで登録するのですが、CBIの講義では、講義の6回目から、1回3時間の講義のうち、1時間程度が学生グループによるプレゼンテーションで構成されていました。プレゼンテーションは苦手な嫌だけれど、Aliの講義に出たかったから登録したという学生もいて、学生の間でもかなりの名物講義のようです。各回とも、イノベティブな行為やもの・ことづくりの事例から始まり、理論的な解説が2時間続いたあと、事前に指定された5人ほどで構成される学生グループが、与えられた「お題」を独自の視点や手法を披露しながら20分ほど発表し、10分程度の質疑をこなします。学部の講義ですが、プレゼンは見応えがありました。「健康×イノベーション」のテーマでは、海外から働きにきているナニー(子育てのためのお手伝いさん)に乳がんが多いことを

取り上げて、彼女たちに直接インタビューして「日曜日しか休みがないから病院にかかりにくい」「香港に来て、病院にいったことがない人がほとんどである」ことを浮き彫りにして、ITによる簡易検診の充実などの提案を行うグループもありました。社会問題について、イノベーションを用いてどうクリエイティブに変革できるかを懸命に考え、訴えていた姿が印象的でした。香港では共働きが普通ですので、学生たちも幼少のころ、海外から来たナニーたちにお世話になったのかもしれない。

BTの講義では、チームラボの「アート×教育」が詳細な検討事例として取り上げられていました。他にも、セイコーが高級時計の生産に舵を切る際に行われた、経営者へのインタビューが講義内で使われるなど、日本における組織や企業の取り組みが多く紹介され、議論の対象となっていました。Aliが日本好きなのもありますが、日本にはまだ魅力的な事業や企業がたくさんあるという内容で、ちょっと安心しました。

### 3. 多国籍の学生たち

香港大学は国立大学なので、定員の9割の学生は香港人であることが求められます。実際、学内での学生たちの会話は広東語がほとんどですし、学生寮でも学内掲示板でも、学生間の連絡等はほぼ漢字表記(繁体字)です。理系、特に工学部系の学生たちと留学について話したときは、「留学はしないとと思う」「まわりも全くしていない」ということでした。英語での会話能力も、日本人の学生たちと余り変わらないようです。ところが、経済・経営学部では全く違います。学部の3年生になると1年間留学するのが標準で、12月から順次、海外の提携校に旅立ちます。多くの学生を送り出すということは、迎え入れる数も多いことの裏返しであり、上述のCBIの講義では、25名の学生のうち19名が海外からの留学生でした(日本からも1名いました)。みな、怪しいながらも堂々と英語で論を展開し、発表を行います。アジアからのみならず、イギリス、フランス、ドイツ、トルコ、イラン、アメリカ、カナダからも複数名の留学生がいて、学部の講義でも多国籍化が進んでいました。もちろん、プレゼンテーションのグループも多国籍の学生で構成されている



CBIの最終講義にて



香港で研究している皆さんと忘年会

ため、前提となる知識や常識が違っていて、最初はプレゼンの方針を立てることですら大変だったようです。

とても素敵な学習環境だなと思っていた矢先、パリで同時テロが発生しました。講義のなかで「唯一神」について語ろうとする学生が出たりして、騒然となった回もありました。「科学者は神でなくデータで語れ!」という教授の一言で事態は収拾しましたが、「国際化」の難しい局面を垣間見た瞬間でした。ただ、最初は出身国かその周辺国の仲間とばかり席を囲んでいた学生たちも、講義が進んで様々な国籍の学生と共同でプレゼンを行う機会が増えるにつれて次第に席を選ばなくなり、みんな打ち解けて仲良くなり、最後の講義では記念写真もパチリ(CBIの最終講義)。こうした多国籍の日常化が平和への礎となることも改めて感じました。

#### 4. おわりに

香港で暮らしていると、中国本土からの恩恵、例えば多くの観光客が押し寄せて観光産業や小売業が活性化している点や、安い賃金で働く労働力を豊富に確保できることで充実したサービスを謳歌していることがひしひしと感じられます。学内の研究や教育についても、中国本土から資金やデータを入手し、豊富な資源を活かした相互交流（セミナーや共同研究）が盛んに行われています。また、ものづくりの集積地域である深圳は、香港の中心から鉄道で約1時間の場所に位置しており、金融とものづくりの融合においても、中国本土との結びつきは益々強くなることでしょう。

反面、行政府において、香港の全大学生に1年間の中国本土の大学へ留学を強制する案が出たり（結局、資金面での問題や学生の反対などによって取り下げられた）、香港大学の副学長に選ばれた法学部教授が行政府によって拒否され、結局、学内の理事会が違う人事を通すとといった混乱も起こっており、

政治との間合いは難しさを増しているのも事実です。

みなさんがこの稿を読まれるころ、私はちょうど帰国の途についている時期です。研究と教育の両面で、貴重な機会を与えてくれた香港と香港大学に何がお返しできるか、日本とどうつながることでより輝いてもらえるか、素早く検討して実行に移したいと考えています。素晴らしいケーススタディも、教材に仕立てて、日本からたくさん提供する予定です。みなさんも、揺れ動きながら懸命に「次」を模索している魅力あふれる香港へ、是非、お出かけください！

#### 略歴

---

##### 大串 葉子（おおぐし ようこ）

1997年英国マンチェスター大学大学院修了、2000年九州大学大学院経済学研究院博士後期課程修了。博士（経済学、九州大学）。2001年新潟大学経済学部准教授（現在に至る）。